

## 〔学 会〕

## 東京女子医科大学学会 第143回例会抄録

日 時 昭和42年4月28日(金) 午後1時30分より

場 所 東京女子医科大学本部構座

## 1. コイの網膜の組織学的組織化学的研究

(解剖)

飯沼 守夫・○秋山俱子・宮坂 孝子

コイの網膜の各層における細胞数の比を見ると、桿状細胞 200個に対して、錐状体細胞20~30個、水平細胞を除いた内顆粒層の細胞 30~50個、水平細胞は3~9個、神経細胞層の大きな神経細胞は1~2個、Müller細胞は1~3個である。視神経乳頭に近い部分と、網膜周辺部との構成細胞の比をくらべても大きな差はないようである。

コハク酸脱水素酵素の活性は錐状体細胞の内節に最も強く、モノアミノオキシダーゼの活性は外網状層から内顆粒層にかけて認められる。ズルファターゼの活性は水平細胞にも認められるようである。

過ヨウ素酸化後シフ試薬で染色を行なうと内顆粒層、内網状層が強く染まり、また内境界膜、Müller細胞が強く染まる。酵素消化後、染色を行なうと染色の弱くなる場合と、強くなる場合とがある。その染色性より桿状細胞の核は特別な構造を有する事が想像される。

## 2. 外陰癌の放射線治療の2例

(産婦人科) 笹本 佳子・○伊藤よし子

(放射線科) 池田智恵子

外陰癌は、放射線照射によく反応するといわれているが、その周囲粘膜の照射に対する反応が多様性であるため、照射技術にかなり困難があり、照射法の定型化が妨げられている。私共は、昨年および1昨年1例ずつ2例の外陰癌患者を経験した。

第1例は、入院時左右単徑リンパ節の腫脹を触れ、小陰唇下部に潰瘍を認め、病理学的診断では扁平上皮癌であつた。X線外部照射、空中線量で左右単徑部 1600R/6T、両側骨髄壁1800R/6T、原発巣1600R/6T照射を行ない、現在1年7カ月を経過し、再発の徴候なく、良

好である。第2例、入院時右小陰唇から大陰唇にかけ、色素沈着を伴つた潰瘍を認め、病理学的診断は扁平上皮癌であつた。X線外部照射に対し、円型にくりぬいた鉛板を潰瘍部に当て、周囲組織へのX線被曝を防護すべく工夫した。空中線量5000R/6T照射し、順調な照射経過を得た。

## 3. 胃癌手術後の続発性ヘモクロマトーシスと思われる1剖検例

(小坂内科) 水野 美淳・羽倉 稜子・

岡田 薫・○高取 悦子

(病理) 今井 三喜

胃癌の手術後、腹水、浮腫を主訴として入院、剖検上ヘモクロマトーシスであつた1症例を報告した。

症例は、74才男性。昭和38年11月胃癌にて胃切除。術後抗癌剤による治療を続行。40年7月、全身倦怠感、浮腫を主訴として入院。高度の貧血、白血球減少著明であり、抗癌剤による汎血球減少症と考え、輸血、Steroid投与行なう。これにより貧血、浮腫共に著しく改善され、10月退院。退院後、Steroid および鉄剤の投与を受けていた。41年4月、下肢の浮腫、腹水を指適され、再入院。入院時検査成績では、貧血は軽度、血清総タンパクは低下していたが、肝機能検査では異常を認めなかつた。利尿剤の投与を行なつたが、腹水は増加の一途をたどり、全身衰弱のため死亡。

主要剖検所見は、色素性肝硬変、脾の萎縮、脾・脾・小腸にヘモジデリンの沈着が認められ、特に肝・脾に著明であつた。

末期にタンパク分割にてγ-グロブリンの増加、総ビリルビンおよびアルカリフォスファターゼの増加を認めたが、肝機能障害の程度は軽微であり、尿糖は陰性であつた。皮膚にも色素沈着は認めず、色調も異常といえる程でなく、死亡前ヘモクロマトーシスの診断の困難であ

つた症例である。

#### 4. 腎性高血圧症の腎摘出術の際、術中血圧管理にアフォーナードおよびインデラルールを使用した例

(麻酔科) 三谷 仁

腎動脈異常を伴う腎性高血圧症の手術の際、術中の血圧および脈搏数を管理する目的で、硬膜外麻酔併用のGOF(フローセン、ガス、オキシジエン)麻酔を試みたが、硬膜外麻酔が不成功であったので、節遮断剤の一つであるアフォーナードおよびベータ遮断剤の一つであるインデラルールを用いた。術中の血圧脈数は容易に調節され、満足すべき結果が得られた。

#### 5. 高血圧患者における甲状腺機能について

(三神内科) ○渡辺 順子・  
梅岡 智子・齊藤伊希子

血圧の異常と内分泌ホルモンとの関係については、既に多くの研究発表であるが、甲状腺、腎、副腎、性腺、自律神経等の相互間にも血圧に関し、また複雑な関係があることは周知の事実である。特に内分泌性高血圧因子としてのホルモンが、本態性高血圧に対しても、また補助的に作用していることも明らかなることである。

演者の一人渡辺は、さきに東京女子医科大学学会第129回学会に於いて、「実験的高血圧とステロイドホルモン作用」について発表し、上記の関係を明らかにしたが、今回は甲状腺機能が高血圧症に及ぼす影響を検討するため、本態性高血圧患者ならびに若年性高血圧患者の甲状腺機能(PBI, トリオソープ, 基礎代謝, 血清コレステロール等)を測定し、それらが血圧上昇といかなる関係にあるかを検討してみた。その結果、われわれの症例では、基礎代謝の上昇は認められなかつたが、PBI, トリオソープでは、値は正常範囲であるが高値を示していることがわかつた。

#### 6. 消化器病センターにおける早期胃癌症例について(主に内視鏡的所見について)

(消化器病センター) 中山 恒明・中村 光司

胃癌の根治には現在、早期診断、早期治療しかない。早期胃癌診断に対する内視鏡の役割は大きなものになってきた。

当消化器病センターでは、開設以来本年3月まで2年1カ月間に、胃内視鏡例数2137例を数える。そのうちファイバースコープ1040例、V型が621例、Vb型476例である。

この間に切除を受けた早期癌が24例あり、切除胃癌に

対する早期癌比率で表わすと18.1%となる。

自験例24例を内視鏡学会分類別にみると、I型が4例、IIa型が3例、IIc型5例、IIa+IIc型1例、III型6例である。

24例の早期癌について述べると共に症例を供覧した。

#### 7. (症例検討会)

##### 貧血の症例

司会 山田喜久馬

追つて全文を本誌に掲載する。

#### 8. 結節性動脈炎の1例

(第一病理) 平山 章

症例：31才未婚の女子。家族歴：兄弟8人中に不整脈、関節リウマチ、肺結核あり。既往歴：昭25年に軽いタンパク尿があつた。既往に特別な薬剤との接触なし。現病歴：昭33年、23才の頃冷水に手を入れると蒼白となることあり。

昭36年、26才、瘰癧治療中腎炎といわれ治療、同年9月、全身倦怠、頭痛、項痛、嘔吐あり、結核性脳膜炎として昭37.4月まで入院。髄液培養では結核菌陰性。9月、結核性心外膜炎で入院、3者併用とSteroid剤投与をうけ3カ月で治癒。その後時々熱発、移動性関節痛、動悸、息切れ、血沈促進あり。Steroidによく反応。昭40年8月入院。各種検査をうくるも異常なし。膠原病の疑をもたれ、昭41年2月退院。その後手指瘰癧から熱発、関節痛、両下肢シビレ、運動障害出現。9月入院。Myeloradiculoneuritisといわれ治療するも熱発、上行性麻痺および手指、足趾の乾性瘰癧増悪、10月9日死亡。

剖検所見：体格中等、栄養衰えた女性。四肢末端、右膝蓋部皮膚に乾性瘰癧あり、下肢に軽度の浮腫。左肋膜、心囊全面、腹膜一部に線維性癒着。両心房室軽度拡張、両肺肋膜下につよい無気肺、横隔膜高位著し。出血性腎盂炎、子宮腔部の出血壊死の他、各臓器のつよい濁濁・腫脹以外肉眼的に著変なし。鏡検の結果は、脳、脊髓、肺を除く殆どあらゆる臓器組織に新旧の結節性動脈炎(以下PNと昭称)が認められ、末梢神経症状は脊髓栄養血管の広汎なPNにもとづく二次的症候であつた。

PNの臓器分布の情況は、筋肉、皮下組織、関節、心外膜、脊髓栄養血管、骨髄等ではPN分布が広汎かつ多形であり、末期のSchubもこれらには特につよく起こつたことを示していた。一方、本例の血清について蛍光抗体間接法による抗核因子の検索と、脳、脊髓、筋肉、腎、肝等について蛍光抗体直接法による日脳、ヘルペスグル